

# 「知恵の研究」 試論

## An Essay on Study of Wisdom

南 雲 功\*

Isao NAGUMO

**要旨：**専門的知と日常的知の交流をめざし、本論では「日常的知恵」という概念に注目して検討した。「知」の概念を分析する上で手がかりとして、アリストテレスによる「知」の分析を参考にしながら、哲学的な「ソフィア」ではない、日常的な「知恵」について論考を試みた。「知恵」を『知識』の使用法と定義することにより、「知恵」が「知識」との間に循環的な相互作用を担う概念となる。現代社会の特に専門的な「知」は、「知識」に偏重する傾向を有している。全知全能の絶対者ではない人間にとって、多様な状況の変化に対応していく知性のあり方は、「知識」と「知恵」の相互作用の中にあるといえるだろう。

**キーワード：**知恵, 知識, 生活, 専門, 知の循環

### 序

高度情報化社会において、各分野とも専門化が極度に進展している。高度な技術を支える上で専門の深化は効率的なシステムであるが、逆に一般的な良識ある批判から遠ざかることになる。他分野からの発展的批判から閉ざされた世界は、自己撞着的となり、暴走しかねない。特に、実践の中にいる生活者の意見は、現実的感性に基づくものであり、真摯に受け止める必要がある。ところが、生活者の立場では、専門分野に深入りできず、観衆の立場でしかものが言えない状況でもある<sup>1</sup>。そこで、専門家と生活者の知の交流が可能であるか。どのようにすれば可能となるかについて、論考することを目標とする。本論では主に「知恵」について考察した。

### 1. 問いの概念について

「専門家と生活者の知は交流可能か」という問いについて、「専門家」「生活者」「知」「交流」とは何か明らかにしなければならない。これらの概念について、簡単に触れ、今後の研究課題とする。本論では主に「知恵」について論考した。

---

\*なぐも いさお 准研究員・放送大学（在学）

### 1.1 「専門家」とはなにか

「専門家」について奈良らは、「専門家とは、ある分野やことがらなどについて専門に研究・担当・従事し、それに精通している人のことをいう」と定義している（奈良、伊勢田、2009、13-14）。つまり、「特定の分野についての専門知識をもち、その専門知識に基づきなにかしらの社会的活動を行っている者」である。専門家は科学技術ばかりでなく、経理、人事などの実務家や、芸術家、歴史学者、宗教家など文化まで含めて、「特定の分野の知識を持つ者」である。

### 1.2 「生活者」とはなにか

同じく奈良らは、「生活とは、人間と環境との相互作用のうちに営まれる、人間としての生命を維持発展させるのに必要なすべての過程のことをいう」と定義している（奈良、伊勢田、2009、9）。この活動を行う者が「生活者」となる。ところが、「生命の維持発展」することだけが人間の生活の目的であろうか。つまり、「生きる」以上の価値を認めないのかということである。「ただ生きるということではなくて、善く生きるということ」（プラトン 田中美知太郎、藤澤令夫訳、2002、111）をめざして死刑を受け入れたソクラテスの視点が欠けているのではないか。さらに「尊厳死」を含む生命の倫理問題まで考慮した「生活」の定義づけが必要であろう。個人の生き方の根源に根差す問題を含む問題である。本論では、「生活とは、人間と環境との相互作用のうちに営まれる、人間の生の活動に必要なすべての過程のことをいう」とする。奈良等の定義も含めて、「生活」には「専門家」としての活動まで含まれることになる。

人間として生きている者すべてが生活者であり、個々に専門を持って生活している。すべての人間がなにかしらの専門家でもある。すなわち、技術者のような専門家ばかりでなく、専業主婦であっても、家事の実務的専門家であり、入院患者であっても、病気を現実に体験していることの知識を持つ専門家である。医者は、病気を直す専門家であるが、患者は、病気を体験し、日々その病気の経験としての知識が得られている。

### 1.3 「交流」について

「知」の交流は、主にコミュニケーションの研究に属し、哲学分野では、「間主観性」の問題となろう。「知」の概要がある程度明らかにされなければ論じられないので、今後の研究課題とする。

## 2. 「知」について

「知」は、「知識」「知恵」「知性」「知能」などの概念が多義的にからみあい、研究分野によっても定義が異なり漠然としたものとなっている。本論では、アリストテレスの分類を参考にしつつ現代の学問分野を考慮して「知」の分析について検討を試みた。

### 2.1 アリストテレスの「知」

「知」についてアリストテレスは、『ニコマコス倫理学』の第六巻「知性的な卓越性（徳）」で「真を認識」するものとして、五種類の「知」を挙げている。「技術（テクネー<sup>2</sup>）、学（エピステーメー<sup>3</sup>）、知慮（フロネーシス<sup>4</sup>）、智慧（ソフィア<sup>5</sup>）、直知（ヌース<sup>6</sup>）」である。ここで、偽に陥る可能性から思念（ヒュポレープシス）とか臆見（ドクサ）を省くのである。（アリストテレス、1971、220）

内容は、まず、「エピステーメー」は必然的、永遠的であり、教えることができ、論証ができるという状態である。即ち論理的に普遍的であり、科学的知識に近い。「テクネー」は「その

真を失わないことわりを具えた制作可能の状態」である。現実的な、技術、芸術などの制作的な知識である。「ソフィア」を持つものとは「単に根源から導出されるところを知るにとどまらず、根源それ自身に関してもまた、その真を認識しているのではなくてはならぬ。かくして、最も尊貴なものに関しての、いわば頭首を具備した学でなくてはならぬ」という。フィロソフィア（知を愛する、すなわち哲学）という語が示す通り、「ソフィア」とは、ソクラテスが求め続けたものである。これに対して「フロネーシア」のあるひととは、「立派な仕方でも思量し」、「一般的な仕方でも、何が「よく生きる」ことにいいか、「諸般の善と悪に関して、ことわりを具えて真を失わない実践可能の状態」である。「ヌース」について、高田氏の訳は「直知」であるが、他所で「知性」という訳語を使用している。高田氏は注で「本巻第六章においては『ヌース』は特に術語的に限定され、他の類語から区別される。（同章を参照。こうした意味の場合は、だから、「直知」という別の訳語を用いざるをえなかった。）」と述べている。知性的直観のようなものであろう。（アリストテレス、1971、254-255）

それぞれの概念の関係についていくつか列挙してみると、

- ・知性的な性質の「状態」には忘却があるが「フロネーシス」にはない。
- ・「エピステーメー」は、基本命題の上に立ち、基本命題にかかわるものは、「ヌース」である。
- ・「エピステーメー」は論証的で、「テクネー」や「フロネーシス」は多様の。
- ・「フロネーシス」は究極の「個」にかかわる。
- ・「ソフィア」は、人間の幸福の考究の対象としない。一方、「フロネーシス」は、関心を持つ。

すなわち、「知識」は忘れるが、「知恵」は忘却という性質のものではない。また、「知識」の根源的基礎づけは、「直観」によるものであり、「直観」を論理的に体系化したものが、「学」となる。「学」は普遍的な知識であるのに対して、「技術」と「知恵（フロネーシス）」は、多種多様なもののひとつであり、特に「知恵（フロネーシス）」は「個」に関わる。このことを踏まえて、次項では、現代の「知」について分類的検討を試みる。

## 2.2 現代の「知」の分類試論

「エピステーメー」に対応して、「科学知」を代表とする言語的記述が可能な概念的知識として「言語的知識」とする。「テクネー」は、「わざ」の知識。あえて「技術」としないのは、現代技術が多分に概念的な言語による知識に依拠していることから、非言語的意味を強調するために「わざの知識」とした。「言語的知識」と「わざ」が知識であり客観的である。「ソフィア」には、人間が究極的に求めてきた概念的な「叡智」。「フロネーシア」を「日常的知恵」とした。「叡智」と「日常的知恵」は主観的であり「知恵」である。「ヌース」は、「直観」とする。

「言語的知識」と「叡智」は概念的であり、普遍を求めている。「わざの知識」と「日常的知恵」は現実的個に対応している。

我々が「知識」と言うときには、一般に「言語的知識」を指すことが多いが、「わざ」まで含めて、知っていることであり、他者への伝達は可能である。言語を使用することの他に、「わざ」が伝達できることを生田らは、歌舞伎、和太鼓、スポーツ、看護の実践等の事例を挙げている。（生田ら、2011、i-vii）このように知識は概念でも、具体的な現実でも教えることができる。

「知恵」は、日常的によく使われる言葉であるにもかかわらず、その本質は検討されていないのではないだろうか。哲学で議論される「知恵」は「ソフィア」の知恵である。

知恵は、伝達できない。体系的に構成できないからである。従って、他人の知恵を個別に学び、そこから試行錯誤により探し求めなければならない。「創造性」は、「知恵」の一部である

が、創造性開発の訓練がどれだけ有効であろうか。「知識」の伝達ほどには効果はない。「知識」は、「四則演算」や、「読み書き」、「自転車の乗り方」「水泳」などは、きちんとした指導者が指導すれば、ほとんどの人が基本的なことは習得できる。ところが、新たな状況にとっさに対応する知恵の開発に対する教育による効果はかなり低い。「知識」は学ぶことができても「知恵」は教えることはできないのである。

### 2.3 「知識」について

「知識」とはなにかの議論は、哲学においては認識論としてプラトン<sup>7</sup>以来検討されているが、主体の信念としての知識の根拠の正当化（基礎づけ）が、無限後退を起こし、真理であることの妥当性が確立されていない。そこで、知識の妥当性を、他の多様な知識との整合性に求める整合説が有力となっている（門脇、1996、56-60）。しかし、日常生活の中の知識は、知識全体の中での整合性を問題にするよりは、知人が言っていた、本に書いてあったなど、主観的な基礎付けがなされており、日常の問題が生じない限りでは、論理的矛盾は問題とされない。「科学的知識」と「日常的知識」の差異についても検討の余地がある。

## 3. 「知恵」の研究試論

### 3.1 知識と知恵の関係

「知識」と「知恵」の関係を考える上で一方が欠如している状況から考察する。

「知恵」の欠如した「知識」とはいかなるものか。それは、動物の本能のみによる行動のようなものであろう。本能とはア・プリオリな「知識」とも考えられる。通常の活動は、本能で十分であるし、本能により生命を維持してきた。進化の過程で、環境に適合した本能を持ったものが生き残ってきた。しかし、本能だけでは、新たな状況に対応できず、新たな環境を創出していくことはできない。ここに、人間の「知恵」を持つものとしての優位がある。

逆に、「知識」のまったくない状況で、「知恵」だけで行動できるだろうか。言葉の通じない、外国の見知らぬ街に放り出された場合、それでもわずかばかりの知識を頼りに、なんとか窮地を脱する知恵を絞り出すだろう。言語以外で、その住民と共通の知識を模索していくのである。知識がなければ知恵は発揮できない。しかも、使える「知識」とは他者と共通の「知識」でなければならない。つまり、「知識」のない「知恵」はありえないのである。

ところが、すべての「知識」を知っていたとしたらどうであろうか。全知の絶対者は、あらゆる状況についての「知識」を持つのであり、「知恵」を出す必要がない。では、「知恵」とは、「知識」の不足を補完するものであろうか。絶対者にはあてはまるだろうが、不完全な人間であれば、「知恵」と「知識」の循環のなかでしか変動しつづける環境に対応できない。持っている「知識」を、いかに有効に使って新たな局面を打開していくことが知恵といえる。このことから「『知恵』は『知識』の使い方」と言えよう。

### 3.2 「知恵」が「知識」の使い方であり、新たな「知識」の創造

ソフィアとしての「知恵」については、哲学が長年研究してきた課題であるので、本論では、「日常的知恵」を問題とする。工場や学校の教育の場では、「知識」を使用する条件が整えられているために、「知識」の拡大が問題解決の手段として使える。しかし、様々な状況の変化する生活の場で問題解決することは、専門知識よりは、自前の知識を如何に使いこなすかの問題になる。レヴィ・ストロースのブリコラージュ<sup>8</sup> (Bricoleur) のように既存の材料や「知識」の有効

な使用法が要請される場となる。

「日常的知恵」が必要となるのはどのようなときであろうか。それは、既知の「知識」で対応できない状況に遭遇した時であろう。既知の「知識」で対応できないときには「知恵」が発揮され、その問題解決が図られた時、この実績が「知識」として、他者に伝達が可能となる。つまり、「知恵」とは、「知識」の新たな使いかたであり、「知識」の創造でもある。

こうした「知恵」の活用は、専門家の領域にもある。発明、発見には、既存の「知識」に基づく「知恵」の発揮が欠かせない。しかし、専門家の「知恵」の多くは、環境の変化を予め想定していることにある。想定された環境に基づいて「科学知」の利用が行われている。専門家は知識を現実の利用場面で、想定した環境の変化内で使用されている。

ところが、日常生活は、多様な環境の中で営まれる。想定された「知識」の範囲内では、既存の「知識」だけで対処できる。しかし、想定されていない環境に対して、既存の「知識」を利用しつつ、「知恵」を発揮しなければならない。しかも多くが、時間的余裕はない。

### 3.3 知識過多と知恵の出し惜しみ

「知恵」を「知識」の使用法とした。「知識」がなければ、「知恵」は出せない。新たな状況で、「知恵」が発揮されると、この「知恵」が、新たな「知識」となる。「知恵」は「知識」としてしか伝達できない。こうして、「知識」から「知恵」を生み出し新たな「知識」ができるという「知」の循環が、生活のなかで常に廻っている。ならば、使える「知識」は多いほうがよい。ところが、多すぎる「知識」の量に応じて、使いこなす「知恵」も向上しなければならない。結局、使い慣れた「知識」、お気に入りの「知識」だけが使われる。このことは専門家にも言える。他者の「知識」を排除することは、使い慣れた「知識」が使えない不安がある。さらに、大量の「知識」を持つと、絶対者の視点に立つといううぬぼれが生じてしまう。特に科学的知識は、理性に基づく合理的知識として尊重されているので、専門家は、その分野についてすべてを見通せる「知識」を持っているという誤まった意識が生じる。知恵を出さずに、「知識」だけで対処しようとするのである。

### 3.4 「直観」という知

以上、「知識」と「知恵」について考察してきたが、日常の生活の中で、「直観」という「知」の形態がある。「ヌース」に対応するものである。経験知としての記述可能な知識でもなく、「知恵」のように具体的な結果に至る知でもない。しかし、道徳法則への崇高の念を抱く根拠は「直観」であり、数学や科学の分野でも公理系の基礎概念は「直観」に頼らなければならない。日常における「直観」も今後の研究課題としたい。

## 4. 「専門家」の視点、「生活者」の視点

生活は「知識」と「知恵」の循環の中で営まれる。しかも、現代のネットワーク社会では、「知識」は容易に得られる。今、求められているのは、大量の「知識」を如何に使いこなすかであろう。専門家の視点はより多くの知識を収集し、現に起きていることの原因を分析し、今後予測される事態に備える指針を提供することになる。一方、生活者の視点は、現に起きていることに、対処するために「知恵」をめぐらしていくことである。専門家の「知識」と生活者の「知恵」の相乗効果により、知識が生かされ、健全な進歩が期待される。

## 文献

- アリストテレス (高田 二郎訳), 1971年『ニコマコス倫理学 (上)』岩波書店 (文庫)  
生田久美子、北村勝朗, 2011年『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会  
門脇俊介, 1996年『現代哲学』産業図書  
戸田山和久, 2002年『知識の哲学』産業図書  
奈良 由美子・伊勢田 哲治, 2009年『生活知と科学知』放送大学教育振興会  
プラトン (田中美知太郎、藤澤令夫訳), 2002年「クリトン」『ソクラテスの弁明ほか』中央公論新社  
レヴィ・ストロース (大橋保夫訳), 1962年『野生の思考』みすず書房  
鷺田清一, 2015年『しんがりの思想』角川書店 (新書)

## 註

- 1 鷺田は生活者が技術に対し、観衆の立場に立つために、クレーマ的にしか物を言わなくなっていると分析している。(鷺田, 2015, 47-49) など
- 2 テクネー  $\tau\epsilon\chi\nu\eta$  わざ、術、策、「現代的意味の学問、芸術、技術等幅広い」
- 3 エピステーメー  $\epsilon\pi\sigma\tau\eta\mu\eta$  練達、熟練、知っていること、知識、学知、学問
- 4 フロネーシス  $\phi\rho\nu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$  意図、考え、気持ち、心、思慮、思想、知恵、知力、知能
- 5 ソフィア  $\sigma\phi\iota\alpha$  知恵、才知、知識
- 6 スース  $\nu\omicron\nu\sigma$  知性、理性、才知
- 7 プラトンは、知識の条件として①信念②真実③正当化の三条件を満たすこととした。③の正当化を保証する知識が、更なる正当化を求め無限後退を起こす。(戸田山, 2002, 1-21)
- 8 プリコラージュ (Bricoleur) 器用仕事、ありあわせの道具と材料を用いて何かを作ること。明確な概念を用いる近代的思考とは異なる、人類に普遍的な思考を表す。(レヴィ・ストロース, 1962, 22)